



～阪神高速のある風景～  
 第5回 阪神高速フォトコンテスト優秀賞写真

CONTENTS

エッセイ●季節の言葉

湧き立てオタマジャクシ 中田兼介

この出入口のこと知ってる?●阪神高速の出入口再発見!

1 **きたはま  
 [北浜]**

1号環状線 [北浜出口]  
 緒方洪庵が大阪・北浜に開いた「適塾」。  
 福沢諭吉、大村益次郎など逸材を輩出しました

関西の名工

4 **平井 守**さん (筆記用具視物師)  
 木のぬくもりが感じられる、  
 ひとつとして同じ物がない木製筆記具

教えてセンセイ

6 **岡本 健**さん (近畿大学教授)  
 ゾンビは日常を非日常に変えてしまう存在であり、  
 人々の想像を超える自由さが魅力です

阪神高速の取り組み

8 第二神明道路 [須磨IC] ↔ 3号神戸線 [湊川]・  
 湾岸 (垂水) 線 [垂水JCT] ↔ [名谷JCT]  
**終日通行止  
 リニューアル工事を行います**

ちょっと行ってみたい関西うまいもん

10 **うすいえんどう** ●和歌山県日高郡みなべ町

Hanshin Highway TIMES

12 第6回フォトコンテスト「阪神高速のある風景」開催中  
 「阪神高速 広報ギャラリー」



表紙イラスト (「適塾」外観)  
 ヤマサキタツヤ: 大阪生まれ大阪育ちのイラストレーター。読書やWebなど各媒体で活動。  
 「来た見た食うた 大台南見聞録」(書肆侃侃房) など主に台湾に関する書籍を出版。

エッセイ **春** 季節の言葉

明けない夜はないもので、冬があるからこそ、  
 日々温かくなり生きものたちがあふれはじめる  
 この時期を、ひとしおうれしく感じます。そんな  
 季節の進みを知らせてくれる代表選手がサク  
 ラの花。1953年から気象庁が全国で開花や  
 満開の時期を記録していて、私たちは「今年は春  
 の訪れが早いね」と  
 か話題にします。

**湧き立てオタマジャクシ**

首尾よくつがい  
 産むのは水の中

トノサマガエル  
 もこの時期に動きはじめ、眠りから目覚めて水  
 辺に集まります。産めよ増えよ地に満ちよ。メ  
 スを求めるオスたちが、両のほおをふくらませ、  
 大音声で鳴く姿は良いものです。  
 両性の出会いに、メスも鳴くことがあるのが  
 このカエル。鳴き袋を持たないメスの声は小さ

く、大合唱とはいきませんが、それでも鳴かれた  
 オスは近づくのをやめ、離れていくことが多い  
 とか。卵を持たないメスがよく鳴くそうです。  
 メスと見ると見境なく抱きつこうとするのがカ  
 エルのオスで、それは準備が整っていないメス  
 には迷惑なのでしょう。

す。硬い殻を持たない卵のこと、乾燥するのはご  
 法度なうえ食べられる心配もあり、親はそうい  
 う危険の少ない場所を選んで産卵します。卵に  
 毒があつて池などに産めるヒキガエルと違い、  
 トノサマガエルは干上がる危険はあつても天敵  
 の魚などがいない浅い水場を好むそうです。

うつつらと水が張られた田んぼの畦を歩き、  
 苗の間に尾をいそがしく振って泳ぐオタマジャ  
 クシを目にするのは5月ごろからでしょうか。  
 ですがそれから1ヶ月ほどで、水は抜かれるこ  
 とが普通です(稲の根を元気にするためです)。  
 それまで急いで成長し、無事に陸に上がれます  
 ように、と祈ります。

サクラと同じくトノサマガエルも、気象庁が  
 季節の進みを知るために、動き出す時期を調べ  
 ていた生きものなのです。他にもトカゲやツバメ、  
 アマガエルが春を教えてくれました。です  
 が、これら人里の動物は今ではすっかり見つけ  
 ることが難しくなつて、2020年を最後に観  
 測は終わってしまいました。春なのに、少し寂  
 しいことだと思えます。

中田兼介 なかたけんすけ(京都女子大学教授)

1967年大阪生まれ。博士(理学)。専門は動物行動学・生態学。現在日本動物行動  
 学会会長かつ日本蜘蛛学会会長。著書に「もえる!いきものりくつ」(ミシマ社)  
 「小説みたいに楽しく読める生態学講義」(羊土社)など

この出入口のこと知ってる?

**阪神高速の出入口再発見!**

**きたはま「北浜」**

1号環状線 [北浜出口]



適塾の西側に隣接した公園にある緒方洪庵の銅像。洪庵は、1862(文久2)年、当時の最高峰の医師として幕府の  
 奥医師に召されて江戸へ出るが、翌年54歳で急死。洪庵の養子・拙斎らが適塾を守り、1886(明治19)年頃まで塾生  
 の教育が継続された。適塾は、大阪医学校など幾多の変遷を経て、現在の大阪大学へと至っている。

**緒方洪庵が大阪・北浜に開いた「適塾」。  
 福沢諭吉、大村益次郎など逸材を輩出しました**

大阪の金融の中心地・北浜のオフィス街  
 に、幕末の蘭学者で医師、教育者でもあつ  
 た緒方洪庵が開いた「適塾」が、往時の姿を  
 今にとどめています。福沢諭吉や大村益  
 次郎など、日本の近代化を支えた多彩な人  
 材を輩出した適塾と緒方洪庵について、大  
 阪大学適塾記念センター・准教授の松永和  
 浩さんに聞きました。

**幕末の志高い若者が学んだ蘭学塾**

備中足守藩(岡山県)の藩士の子として  
 生まれた緒方洪庵は、幼い頃から病弱だつ  
 たため武士を諦め、医者を目指します。大坂、  
 江戸、長崎で最先端の蘭学を学んだ後、  
 1838(天保9)年、現在の大阪市中央区  
 瓦町に適塾を開き、1845(弘化2)年、  
 現在地に塾を移転しました。

洪庵は、昼間は医師として往診にあたる  
 一方、夜は蘭学者として医学書の翻訳に取  
 り組みながら、志高い若者たちに学びの場  
 を提供したのが「適塾」です。適塾での基  
 本的な教育内容は、蘭語の自学自習です。  
 蘭語を習得することで蘭書を通じて医学  
 をはじめ、兵学(軍事学)、砲術、土木、化学、  
 近代思想など、さまざまな西洋の学術を学  
 び、実践できるようにするのが目的です。

門下生には、兵学を学び日本陸軍の創始  
 者となった大村益次郎、開国へ向けて動い  
 た橋本左内、慶応義塾を創設した福沢諭  
 吉、日本赤十字社を設立した佐野常民など  
 がおり、日本の近代化に大きな影響を与え  
 た逸材を多く輩出しています。また、全国

各地から集まった千人ともいわれる塾生の多くは、郷里に戻って西洋医学に通じた医師として地域医療に貢献しました。

適塾では、蘭書の翻訳の出来栄を競う「云読」というテストが月6回行われ、身分や年齢に関係なく、テストの成績によって等級が上がる徹底した実力主義でした。適塾には、常時100名ほどの塾生がおり、うち30人ほどは適塾2階の30畳ほどの大部屋に住み込みで勉強していました。畳1畳が1人分のスペースで、成績が優秀な者が優先的に大部屋の好きな場所を選べるルールでした。

1部しかなかった貴重な蘭語の辞書「ゾーフ辞書」は、ゾーフ部屋と呼ばれた部屋から持ち出し禁止。塾生たちは、ゾーフ辞書を奪い合うように勉学に励み、ゾーフ部屋には夜通し明かりが灯っていたといえます。そんな塾生たちを刺激したのが洪庵。夜中、洪庵の書齋から漏れる明かりを見て塾生たちは「先生もまだ勉強している。もっと励まないと」と思ったといいます。

塾生たちは机にかじりついて勉強するだけでなく、薬品の生成の実験をしたり、豚の目玉の解剖をしたりと、知的好奇心の赴くままに自主的に学んでいます。もともと適塾という名称には、学問の関心のままに学ぶという意味があります。塾生たちが暮らした大部屋の柱には、いくつもの刀傷があるのが今もご覧いただけます。議論が高じて刀を振りかざしたのでしょうか。幕末期、日本をどう変えてい

くべきか、西洋列強にどう対処するのか、彼らは使命感を持って熱く天下国家を論じていたのでしょうか。

そんな塾生たちが母のように慕っていたのが、洪庵の妻・八重です。血気盛んな彼らにときに門限を破るなど羽目はずし、「破門だ！」と洪庵を激怒させます。そんなとき関係を修復させる役割を担っていたのが八重でした。福沢諭吉は、おっかさんのような人だといって、塾を出た後、またたび八重に挨拶に訪れています。

### ワクチン接種にも取り組んだ洪庵

緒方洪庵の蘭学者として大きな業績のひとつが、蘭書の医学書の翻訳です。ライフワークとして翻訳を成し遂げた「扶氏経験遺訓全30巻」には、さまざまな病気に對する治療法(臨床)が書かれています。彼は「扶氏経験遺訓」を翻訳する以前に、まず「人身窮理学小解」という身体のしくみについて書かれた本を翻訳しています。続いて、日本で初めて病気のしくみを解説した、病理学の総論書「病学通論」を翻訳しています。つまり、この3部作により、身体のしくみを知り、病気のしくみを理解し、病気の治療法が学べるよう体系立てて勉強し、翻訳していることがわかります。さらに「扶氏経験遺訓」の巻末部分「扶氏医戒之略」として翻訳しており、そこには「医者人は人のために生きよ」「患者の身分に関わらず平等に診よ」など、医師としての高潔な倫理観が書かれ

ています。これは、適塾の指導要領でもありました。

1858(安政5)年、コレラが大流行した際には「虎狼痢治準」というコレラの治療法をまとめた本も緊急出版もしています。そして、無料で近隣の医師に配布したのです。お金や名誉を求めず、自分の持っている能力を社会に還元することを考えていた人物だったことがよくわかるエピソードです。

もうひとつの洪庵の偉業は、当時、死亡率が高かった天然痘を未然に予防するため、天然痘のワクチン接種(種痘)を開始したことです。1849(嘉永2)年、除痘館という組織をつくり、イギリスで開発された牛痘種痘法という牛由来のウイルスを打つ活動を始めました。ただ、ワクチンのしくみもわからない時代、打つと牛

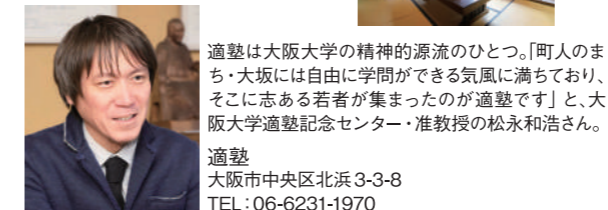


北浜のビル群のなかに建つ適塾。幕末の姿を示す貴重な町屋であり、国の重要文化財に指定。解体修復工事を終えた昭和55年から一般公開されている。



ゾーフ部屋(写真左上)と蘭語の辞書・ゾーフ辞書(複製、写真右上)。写真のゾーフ辞書は頭文字ABを編纂したもので、C~Zまで分冊してあった。各1冊しかなく、ゾーフ部屋からは持ち出し禁止。会読の予習には欠かせず、塾生たちは奪い合うように勉学に励んだ。

洪庵が夜、翻訳などを行っていた書齋。書齋のある1階には、洪庵一家が暮らした家族部屋もあった。



適塾は大阪大学の精神的源流のひとつ。「町人のまち・大坂には自由に学問ができる気風に満ちており、そこに志ある若者が集まったのが適塾です」と、大阪大学適塾記念センター・准教授の松永和浩さん。  
適塾  
大阪市中央区北浜3-3-8  
TEL:06-6231-1970

### ★大阪府立中之島図書館

1904(明治37)年、江戸時代から大坂を本拠地として事業を続けてきた住友家の第15代・住友吉左衛門友純(ともいと)が図書館建物と図書購入資金を寄付したことによって建設された図書館。1922(大正11)年に住友家の寄付により左右の両翼が増築され、ほぼ現在の建物が完成した。石造り三層、銅葺きのドームがそびえる重厚な建物で、国の重要文化財に指定されている。大阪に関係する資料と古典籍、ビジネス関係の書籍を所蔵。



### ★天神橋

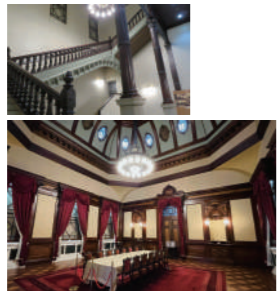
天神橋は、1594(文祿3)年に架けられたと伝えられ、天満神社が管理することから天神橋と呼ばれるようになったという。上町台地と大阪の北部方面を結ぶ重要な役割を果たしてきた。大塩平八郎の乱が起きた際には、反乱軍を防ぐために、幕府がいち早く天神橋を含めた三大橋を壊したとも伝わる。現在の橋は、1934(昭和9)年に、架け替えられたもの。全長約210.7m、3連の軽快な鋼製アーチと両端のコンクリートアーチからなっている。



©(公財)大阪観光局

### ★日本銀行大阪支店

旧館は、1903(明治36)年に、ベルギー国立銀行などをモデルに建設された、ネオバロック様式の格式ある洋風建築。ドーム型の屋根とその両脇には三角屋根があり、外壁には花崗岩を使用。一時は、老朽化と地盤沈下のため取り壊す予定だったが、大阪市民や文化庁からの保存希望を受けて、1980(昭和55)年から2年をかけて旧館の改築工事と、新館の建築が実施された。新館(営業室)と旧館(記念室・階段室・資料展示コーナー)の内部見学ができるツアーも行われている(要予約)。



内部写真提供:日本銀行大阪支店



### ★御霊神社

船場・中之島・京町堀・靱など旧摂津国津村郷の産土神として信仰を集め、「ごりょうさん」と親しまれる。商業金融の中心地にあり、かつては船場の商人や適塾の塾生たちもお参りに訪れていたとか。また、明治から大正15(1926)年まで、境内では現在の国立文楽劇場の前身である、人形浄瑠璃の御霊文楽座の興業が行われ、見世物小屋や夜店が建ち並び、賑わった。戦災に遭いながらも再生した、本殿横のクスノキが御神木。

### ★除痘館跡(除痘館記念資料室)

当時、死亡率が2割を超える感染症であった天然痘から人々の命を救うため、緒方洪庵が種痘活動を行った除痘館。適塾の一筋南側にある「緒方ビル」が建つ場所がその跡地にあり、ビル1階の入り口には除痘館があったことを示すレリーフがある。また、当ビルの4階には、洪庵自らが書いた種痘のあゆみについての資料をはじめ、天然痘や種痘について紹介する「除痘館記念資料室」もある。



### ★大阪取引所

円筒形の壮大な白亜の外観と、ステンドグラスが美しい玄関ロビーを持つレトロなビル。正面には、五代友厚の像が立つ。江戸時代初期、現在の淀屋橋の南詰で、有力商人・淀屋が年貢米の売買を盛んに行い、他の商人たちも集まって市場を形成した。その後、堂島に移り「堂島米市場」と称され、これが世界で最初に先物取引が行われたことで知られる。現在の大阪取引所では、5階の「OSEギャラリー」で取引所の歴史、株式やデリバティブについて学べる展示がされており、見学が可能(平日9:00~16:00)。



### ★難波皮橋

橋詰の4ヶ所の親柱の上に、阿(あ)と呼(うん)それぞれ2体の石造のライオン像が配されていることから「ライオン橋」の愛称で親しまれている。全長約190m。土佐堀川・中之島公園・堂島川をまたがる堺筋に架けられている。難波橋が公儀橋となったのは天神橋と同じく、1661(寛文元)年のことといわれている。江戸時代、この付近は絶好の行楽地で、夕涼み、舟遊び、花火見物などを楽しむ人々でたいへん賑わっていた。

